

聴の母親にとっての手話 ——ろうの子どもをもつ母親への聞き取り調査から——

座主 果林

1 はじめに

子どもを育てる家族は、子育ての中でさまざまな課題にぶつかる。ろうの子どものいる家族においては、コミュニケーションに特徴的な課題があるとされている（金山 2002, 中野 2006）。聴¹⁾の家族にろうの子どもが誕生した場合、音声言語を聴の子どものように聞いて身につけていくことが難しいからである。そのため、ろうの子どもの教育においては口の動きなどから言葉を読み取り音声で言葉を伝える口話法²⁾を中心にした教育方法が長年推進されてきたが、近年では手話を積極的に教育にとりいれるろう学校も登場するなどの変化が起こっている。その一方、人工内耳手術など子どもにも適用できる新しい医療技術も発展してきている。それに伴い、ろうの子どものいる家族がコミュニケーションの課題に対処するための選択の幅は広がっている。

本稿では、このような変化しつつある状況の中で、小学校入学前のろうの子どものいる家族がどのような課題に直面し、それにどのように対処しているのかを明らかにすることを目指す。ろう学校幼稚部に子どもが在籍している母親への聞き取り調査を実施し、手話の使用に焦点をあて分析を行った。なお、母親がろう者である場合には、手話を使用するかどうかなどの過程に大きな差があるため別稿に譲り、本稿では母親自身は聴者であるデータを分析対象とした。

2 現状と先行研究

2.1 ろうの子どもをとりまく現状

本節では、ろうの子どものおかれている現状について簡単に述べる。本稿で対象とする先天的な聴覚障害のある子どもは、およそ 1000 人に 1 人の割合で誕生するとされている。そのうち両親に聴覚障害のない子どもは、およそ 9 割と言われている。

2000 年代になって普及が進んだ新生児聴覚スクリーニング検査³⁾によって、聴覚障害の「発見」はより低年齢化している。この検査の普及により、ろう学校教育相談等における 0～1 歳児の 60%以上が新生児聴覚スクリーニングにより発見された子どもになっている（三科 2002）。従来、乳幼児期の聴覚障害の発見および診断は 1 歳半検診時に行うのが一般的であり、その方法は母子手帳に書かれた「大きな音に対する反応」「声のする方を向くか」などを保護者が観察し、それに基づいて医師が判断するという方法だった。

ろうの子どもについては、従来から早期発見と早期教育の必要性が主張され、ろう学校などで乳幼児期から聴覚を活用する「聴覚口話法」が実施されてきた。聴覚の活用において使用されてきたのは主に補聴器であった。しかし1990年代後半以降は、補聴器の効果に限界が認められる子どもには人工内耳手術⁴⁾も可能になった(黒田 2008)。人工内耳を装着した子どもへの評価研究は近年少しずつ増えておりその多くが良好な発達を報告しているが、研究の多くはサンプル数が少なく、装用時期・失聴時期などにもバラツキがあるため、人工内耳装着児全体に敷衍するには無理がある(大久保 2007)。人工内耳は2006年に2歳から1歳半と適応可能年齢が引き下げられ、より早期での手術が可能になっている。

これらの聴覚活用を前提とした早期発見・早期教育の動きの発展の一方、「ろう文化運動」とその影響を受けた手話を重視する教育も発展を遂げている。「ろう文化運動」は「自分たちには手話という独自の文化がある」と自己規定する(石川・倉本 2002)。この運動はマイノリティの権利を求める一連の運動の影響を受けてアメリカで誕生し、1988年ろう学生のための総合大学であるギャローデッド大学でろう者の学長の就任を求める運動が起こったことなどにより世界中に知られるようになった。

日本でもアメリカの「ろう文化」の影響のもと、1995年「ろう文化宣言」がだされた。この宣言では「ろう者」は「日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」と定義されている(木村・市田 1995)。ここでは、身体的な状況を基盤とした聴覚障害者という括り方を否定し、「ろう者」は「日本手話を日常言語として用いる者」、つまり「言語的少数者」であるとされ、「耳が聞こえないこと」によってではなく、「言語(手話)と文化(deaf culture: ろう文化)を共有すること」によって「ろう」と「ろう者」の社会が定義されている(木村・市田 1995)。このろう文化運動の影響もあり、ろうの子どものいる家族のなかでも手話を積極的にとりいれる家族が登場し(全国ろう児をもつ親の会 2005)、2008年には手話と書記日本語によるバイリンガルろう教育を行う私立のろう学校⁵⁾が設立されるなどの新しい動きが出てきている(明晴学園 2010)。

このように、ろうの子どもと家族をとりまく状況は、一方で聴覚活用を基本とする早期の発見・治療・教育などが進むとともに、手話を全面的に取り入れた教育も登場するなど、多様な方向に発展がみられる。

2.2 先行研究と研究目的

2.1で述べたように、「ろう者」であることは「障害者」であることを必ずしも意味しないが⁶⁾、「言語獲得前の失聴」という医学的な状態が音声言語でのコミュニケーションに困難を生じさせ、コミュニケーションが課題となるという面から考えると、ろうの子どものいる家族の課題は、障害児の家族のいる家族の課題として捉えることが可能だろう。そこで本稿では先行研究として、障害児のいる家族に関するものを取り上げる。

これまで障害児のいる家族をとりあげてきた分野として、家族ストレス論があげられる(前田・大島・石原 1987)。障害児のいる家族をとりあげるうえで家族ストレス論がもち

いられてきたことについて土屋葉（2002）は、「障害や障害者をストレス源とみなし、集団として『危機を乗り越える家族』をあらかじめ想定」することにより「障害者家族への否定的な価値づけが行われた」という観点から批判している。また、障害のある子どもの子育てに関する研究は、母子関係についての研究を中心とするものだった（要田 1999, 春日 2001, 藤原 2002）。子育ての大部分を母親が担っているという現状があるためだが、障害をもつ子どもの出産は母親に責任があるという考え方があること（要田 1999）、そのために母親が障害のある子どもの世話を引き受けていくこと（土屋 2002）が指摘されている。近年、研究の対象は母子関係だけでなく、夫婦関係を中心とする家族関係、地域などの家族外の関係にまで拡大するようになってきている（土屋 2003, 石原 2004, 石川 1995）。

しかしこれらの研究は重度の身体・知的障害をもつ子どものいる家族に関するものが多く、ろうの子どもがいる家族についての研究は必ずしも多くない。海外でのろうの子どもと家族の研究としては、両親のストレスの高さと子どもの社会情緒的問題の頻度との関連を指摘し、早期からのサポートの必要性を指摘したもの（Hintermair 2006）、早期介入プログラムへの家族の満足度の調査研究（Brown et al. 2006）、人工内耳手術後のコミュニケーションの変化について両親の考え方についての調査研究（Watson et al. 2008）などが挙げられる。いずれも調査対象者数が少なく、また早期介入プログラムや人工内耳手術後の教育など国によって環境が異なるため、日本と単純に比較はできないが、前者2つの研究では全般的に早期介入プログラムが家族から高い評価を得ていること、3つ目の研究では人工内耳手術後も家族が必ずしも手話の使用に否定的でないことが示唆されている。

国内での小学校入学前のろうの子どもと家族についての近年の研究は、ほとんどが母親に焦点をあてたものである。これは他の障害のある子どもの場合と同様、ろうの子どもの子育ての多くを母親が担っているからである。特にろうの子どもの教育においては母親による言葉かけを重視する「母親法」が1960年代から提唱され、多くのろう学校に取り入れられるなど、母親と子どもの関係が重視されてきたという背景がある。

国内における先行研究としては、まず母親と子どもの乳幼児期からのコミュニケーションについての一連の研究があげられる（小林ほか 2001, 都築 2008）。これらの研究は、母子の具体的なコミュニケーション場面に注目し、その特徴を明らかにするものである。また、統合保育の場面での子どものコミュニケーションについての母親の不安に注目したものに吉川昌子の研究（1999）がある。滝沢広忠（2005）は、新生児聴覚スクリーニング検査による早期発見後の母親の不安を取り上げ、支援の必要性を指摘している。このように先行研究では母子の具体的なコミュニケーション場面と母親の「不安」が研究されているが、母親が「不安」にどのように対処しているのか、コミュニケーションについて母親自身はどのように考えているのかは十分明らかになっていないといえない。そこで本稿では、小学校入学前のろうの子どもがいる母親がどのような課題に直面しそれにどのように対処しているかをコミュニケーションを中心に明らかにすることを目指す。小学校入学前の子どもがいる母親を対象としたのは、子どもの成長とともに課題が複雑になるため、コミュ

ニケーションの課題に焦点を当てるうえで、この時期の子どもをもつ母親に対象を絞ることが有効と考えられるためである。本稿では特に、手話の使用と手話への考え方に焦点をあて、これを調査と分析の主な対象とした。

3 調査の概要とまとめ

3.1 調査の概要

調査は、対象者に対し半構造的面接調査を行った。本調査は、2008年9月～10月の間に実施した。対象者は、2008年度にAろう学校幼稚部に通園した子どもの母親29名のうち、調査に同意の得られた20名である。分析対象とした11名の母親の家族⁷⁾では、子どもが家族で初めてのろうであった。

質問事項としては、子どもに聴覚障害があることが分かった時期ときっかけ、子育てにおいて特に気をつけている（た）ことや工夫、子育てへの援助や情報収集について、ろう学校幼稚部通園までの経緯と通園後の生活、子どもと家族のコミュニケーション、コミュニケーションの工夫などを用意し、子どもの誕生前後から現在までを時系列的に自由な形式で語ってもらった。その際、対象者に了解を得、インタビュー内容を録音した。

調査は、1対1の面接式の形式で1人あたり1～2時間行った。調査の実施場所は、Aろう学校の協力を得、学校内の一室を借りて行った。この部屋は、普段から調査対象者が子どもとともに利用することが多く、調査対象者にとって利用しなれた場所である。

分析には、録音したインタビュー内容を書き起こしたトランスクリプトを利用する。倫理的配慮として、まず研究への協力については、書面と口頭により研究の目的と方法を伝え、了解を得た。その際、インタビュー内容の個人情報とは特定できないように匿名化されること、ろう学校の教員や他の対象者に個人を特定する形でインタビュー内容を伝えることはないこと、研究目的以外には使用されないことなどを伝えた。トランスクリプト作成後に対象者自身に確認してもらい、論文への使用許可を得た（その際、聴覚障害に関連しない家族の病歴等、調査対象者が使用しないことを希望した一部部分は、分析対象から排除した）。データの引用に際しては、対象者にAさん、Bさんなどの一貫した名前を充てることはしておらず、本文中の引用を通して、どの発言をだれが行ったかは分からないようにしてある。これは、匿名であったとして複数の発言を通じて同一人物であることが分かれば、個人が特定される可能性が高くなるためである。

調査の対象者は、同じ学校に子どもが通う母親である⁸⁾。現在でも手話使用の程度は学校によって大きな差があることを考えると、手話を積極的に活用するAろう学校に在籍する調査対象者は手話使用に積極的な母親に偏っている点が指摘できる。このような点で、本調査はあくまで一時点での事例研究であり、ろうの子どもをもつ母親たちの一側面をみたものである。

3.2 調査結果のまとめ

3.2.1 「今は治るんや、って思って安心して」——「聴覚障害」の「発見」

多くの聴者にとって、ろう者の存在は身近なものではない。子どもの「聴覚障害」が「発見」されるまで母親の多くも「聴覚障害は、まあよく、よくっていうかテレビでもよく見るし、なんとなく」と、「聴覚障害」や「手話」という言葉やその概要を知っている程度だった。ある母親が「耳が聞こえないっていう子がお友達いたんで、聞こえない状況っていうのは、そういう人がいてるんや、世の中にはいてて、その人らが手話で会話してるんや、っていうの知ってたんですけど、まさか自分の子がそうやとは思わへんし」と語っているように、ろう者と知り合いの場合でも、そのことと自分の子どもが「ろう」である可能性は結びついて考えられることではなかった。

そのため、「もう、聞こえて当たり前のように思ってたので」と、子どもが「ろう」である可能性は、まったく想定しないことだった。子どもの「聴覚障害」の「発見」は、「耳が聞こえない子なんか周りには全くなかったんで、すごいびっくり」と、母親にとってまさに予想外の事態であり、「まさか自分の身にね、ふりかかるとは、とは思ってたんですけど」と、驚きとともに迎えられることである。ある母親は、「やっぱり障害児をもった母っていうのは、正直言ってすごい、ショックでしたから」と自らが「障害児の母親」になったと感じ、ショックを受けたと述べている。

新生児聴覚スクリーニングで聴覚障害の可能性を指摘されたある母親は、「まあ、いつか治るというか聞こえるようになるんだろうな、とは思ってたんですけど。でもやっぱりずっとこう、不安やったし、だからこう母乳が止まったり、そういう不安はありましたね」と、子どもが「聞こえないこと」に不安を感じ、「治る」期待を持っていたと語っている。医師の対応もこのような母親の期待を強めるものである。別の母親は「『人工内耳したら治るから、大丈夫』って（医師に）言われてたんですよ。『治るから、聞こえるから大丈夫』って。（生後）14日目に言われたんですよ」と、「聴覚障害」の可能性を告げられるのとはほぼ同時期に、「治る」と言われている。人工内耳をした場合でも聴者と同じように聞こえるようになる訳ではないが、このような説明は「聴覚障害」と告げられ驚いている母親に、治療が可能である、つまり「聞こえる」ようになる、という安心と期待を与える。この母親も「今は治るんや、って思って安心して帰ってきた。それまでもう、ウワーって泣いたんですけど、『治るんや今は』って」と「治る」ことで安心している。

聴の母親にとって、子どもは「聞こえて当たり前」であり、「治る」という期待がショックを和らげるのである。当初「治る」ことを期待していたことを振り返って、ある母親は、「病気は治すもんや、ってやっぱり聴者の考え方として、やっぱりどこか持ってるじゃないですか」と、「聴覚障害」を「治す」という発想は「聴者の考え方」とであると述べている。母親がこのように、「治す」ことを「聴者の考え方」として相対化して捉えるようになる契機は、大きく分けて「子どもと接すること」と、「ろう者や手話との出会い」の2つである。以下、2つの面を順にみていきたい。

3.2.2 「気持ち的には、学校行っていると安心感」——早期からのろう学校通学の意義

ろう学校では、学校によって頻度などは違うが、0～2歳児の乳幼児も乳幼児相談などの形で定期的に学校に通う制度がある。ろう学校について、ある母親は、「(病院で) ろう学校って言葉が初めて出たときにすごい、こう頭の中で、ろう学校ってのが響いて、残ってたのは覚えてるんですけど」とろう学校に通うこと自体に当初、戸惑いがあったという。

しかし実際に通い始めると、ある母親が「気持ち的には、学校行っていると安心感。やっぱり先生とかに会っていろいろ話聞けるし。お友達もできるし、同じような境遇の人がいるし」と振り返るように、母親たちはろう学校に早期から通うことに意義があったと感じている。それは、まず第1に「1人で、何がなんだかほんとに分からなくて、ほんと障害について考えたこともなかったし。だから、1人で家にこもるよりはぜんぜん良かったと思います」と学校に通うことで、「何がなんだか分からない」状況に情報が入ってくるからである。

また、聴覚障害だと分かってすぐろう学校に行くようになった母親は「ろう学校に親の補助というか教育もいろいろあって良かったのかもしれないんですけど、そんなに落ち込むこともなく過ごせたかなあと思いますけど」と早期からの支援によって不安を取り除けることを指摘している。別の母親も「お母さんにすごく意味があると、私は思うんですけど。1、2歳児は」と、子どもよりもむしろ母親自身にとって早期からのろう学校通学の意義があると指摘している。母親に子育ての負担の多くがのしかかる状況の中で、ろうの子どもの教育についての情報が得られること、先生や他の母親と話す機会が得られることなど、乳児期のろう学校への通学は、子どもの早期教育だけでなく、母親にとって重要な支援となっているのである。

3.2.3 「もっと違う接し方をしないとイケないのかな」——子どもとの関係による変化

新生児聴覚スクリーニング検査で聴覚障害の可能性が分かった場合、新生児の段階で「聞こえにくい可能性」が家族に告げられることになるため、基本的な母子関係の構築が難しくなる可能性が指摘されている(河崎 2004)。だが新生児聴覚スクリーニング検査で聴覚障害の可能性を指摘された母親は、「やっぱり小さい赤ちゃんの時と違ってあんまり変わらないじゃないですか。聞こえてる子も聞こえてない子も。だから同じように子育てを楽しめたかなって」と、言葉を介さないコミュニケーションが中心になる時期だからこそ、ろうであるかどうかにかかわらず子どもと関わることができたと述べている。

子どもが成長するにつれ、コミュニケーションの取り方などで聴の子どもと同じようにはいなくなってくる。ある母親は子どもが幼児教室で子どもがほかの子と同じように先生の話聞いて行動することはできないのを見て、「これはちょっとやっぱり、もっと違う接し方をしないとイケないのかな、普通、まあ健常の子と同じようにはしてはいけないのかな、って」と、子どもの周囲とのコミュニケーションを見るうちに、だんだん子どもの育て方について考え方が変わってきたという。

別の母親は早くから補聴器を使用したことについて、「一生懸命声かけとかいろんな音聞かせてたりしてたんですけど、でもぜんぜんそういうタイプじゃなかったんでしょうね。ぜんぜんしゃべってくれないし。でも、そこでやっぱり苦勞しましたね」と、音声言語の発達について、当初の自分の期待通りにはいかなかったと述べている。このように、子どもが成長するにつれ、母親は特に音への反応や音声言語の習得の面で当初の期待を修正するようになっていくのである。

3.2.4 「立派な人たちが多いじゃないですか、生活、仕事持って」——ろう者との出会い

手話の使用には必ずしも積極的でなかったある母親が、学校でろうの母親と会っても「交流は全然なかったんですけど、私の方から、ちょっとそんな感じだったんで、そこまでいってなかったのは正直なところですね、余裕がなくて」と積極的にコミュニケーションを取っていなかったと述べているのに対して、手話を評価し、積極的に活用しようとする母親に共通するのは、ろう者との出会いである。

ある母親は「ろうっていう人に会ったことがなかったんです、〇〇（子ども）産むまで。だからそんな時（子どもがろうだと分かった時）もう、すごいマイナスですよ」と、自分がそれまでろう者と出会ったことがなかったことが、当初、「ろうであること」を「マイナス」に捉えた理由だったと振り返っている。ろう者や手話について知らないことから、「やっぱり知らなかったら、しゃべらないといけない、自分たちと同じように生きていかないとけない、と思って、必死になってしまっ」と、聴者の側に子どもを近づけよう、と考えることになる。

このような感じ方は、ろう者と出会うことで変わっていく。「どうやって育てたらいいんやろう、ってことから分からなくて。でもそのいろんな人に会って、（手話の）サークルとかいろんな」と、ろう者と出会うことで不安が軽減されていったという。他の母親が「手話使ってる人たちとかみて、ろうの人たちみて。立派な人たちが多いじゃないですか、生活、仕事持って。で、こういう風に〇〇（子ども）もなってくれたら、って思えて、すごい気が楽になりましたね」と述べていることから、当初はろう者を知らなかったために、ろうの子どもであることをマイナスに捉えていたこと、ろう者に出会うことがそのような不安が解消されたことが分かる。

3.2.5 「やっぱり内面を育てていってあげるのが一番やなあ」——手話を活用する理由

このようなろう者との出会いは子どもとの関係に及ぼす。「（たまたま出会った近所のろうの家族と）一緒によく遊んでもらって、手話って、〇〇（子ども）に声かけてくとどんどん吸収していくんですよ。いままで分からへんかったことが、どんどん分かるようになっていったんですよ」と、手話によって子どもとのコミュニケーションがスムーズに行えるようになっていった。また、別の母親は「小学部見学させてもらったら、もう、普通やったんです。『え?』って。『え、これがろう? あ、そう』って。ただ手話でしゃべって

るだけ、っていうのがすごく第一印象であって、じゃあ別に、このままでもいいけるかも、って」と手話で学習するろうの子どものためのフリースクールを見学に行った時の驚きを語ってくれた。「ただ手話でしゃべっているだけ」で音声言語と同じように学習や友達との遊びをしている年長の子どもたちを見たことが転機の1つとなったのである。

このように手話は子どもにとって身につけやすい言葉であると母親にとって感じられる。ある家族では、父親も「子どもが近づくよりも大人が近づく方がこの子にとっては早い」と子どもが音声言語を身につけるより、親が手話を身につける方が早いと考えたため、家で手話を使用することを選択したという。別の母親は、「手話を覚えだしたら、もうどんどん、会話というか親子でも通じ合えるようになったから、この子は手話にむいてるんだと思って」と、やはり手話を使うことで子どもとのコミュニケーションがスムーズになったことが積極的に手話を取り入れるきっかけになったと述べている。そして「やっぱり見る力が強いのか」2歳ぐらいから絵本や指文字表に強い興味持つようになったこともあり、得意なことを伸ばす方が親子双方にとって良いと考えるようになったという。そして「やっぱり内面を育てていってあげるのが一番やなあ、というので」と、コミュニケーションをとりやすい手話を使用することで、子どもの得意な面を伸ばし「内面を育てる」ことが重要だと考えるようになった。

このように手話は、子どもにとって理解しやすい手話であると考え、手話を活用することによって子どもの「内面を育て」たいと考えることが手話を積極的に取り入れる理由になっている。

3.2.6 「子どもの気持ちを大事にしてくれる」——ろう学校における手話

本稿で分析対象としている11家族のうち7家族は転校を経験している。このうち5家族は、子どもを手話をとりいれた教育の盛んなAろう学校に通わせるために転校してきた家族である。聴覚口話法を重視する学校では、「聞こえを大事にする学校だったんで声がでたらすごい成功、っていうか、そういう言い方はおかしいけど、いい風にみられる」と聴覚を活用して口話を身につけることが「成功」とされていると母親たちは感じていた。転校を考える第1の理由は、口話が母親の期待するようには成長しない場合である。子どもの口話がなかなか上達しないと、「一生懸命やってたけど、そっちの方向に子どもがむいてくれなかったから、これはちがうと思いましたね」と、ろう学校の教育方針と子どもの発達現状や適性との間で、摩擦が生じる。

発話や聴覚活用が身についたかどうかだけでなく、聴覚口話法を重視する教育方針に疑問を感じることも転校の大きな理由となる。ある母親は口形や発声の教育の時間が長いことについて「今の歳に必要なのはとりあえず遊び」であり「今しかできないことっていっぱいある」と、幼少時から聴覚口話法の勉強に長い時間を割くやり方に疑問を感じていた。別の母親は、「かなりの（聴覚障害の程度が）重度の子でもほんとにきれいにしゃべるようになるんですけど、それは自分がペラペラってしゃべれるのはしゃべれるけど、結局対話

になったときに難しい」と指摘し、「上辺だけ分かってしゃべれてもあんまり、会話が成立しなければ私は意味がないと思うので」と聴覚口話法によって発話ができるようになることと、会話が成り立つことは違うと指摘している。

ある母親は「やっぱり先生の手話力もぜんぜん違うし、なんだろう、すごい子どもの時間、子どもの気持ちを大事にしてくれるように私は思うんですけど」と、手話を活用するろう学校での教育について、子どもの気持ちが尊重されると語っている。子ども同士が手話でやりとりするのを見た別の母親は、「本当に普通、健聴の子が行ってる幼稚園とか保育園と同じような感じの子どもたち」と、口話で会話する学校との印象の違いを指摘している。「最初はやっぱり人とのコミュニケーション大切に」したいからとある母親が手話を使う理由を語ってように、母親たちがろう学校での手話の利用を評価するのは、子どもにとって手話が＜自然な＞コミュニケーション方法である、という点である。

3.2.7 「自分に自信をもって生きていってほしい」——ろうであることと人工内耳手術

以上のようなろう者との出会いや子どもと手話でコミュニケーションを行えるようになることは、母親の「聴覚障害」を「治す」という考え方に変化をもたらす。人工内耳を装着する手術についてある母親は、「病気じゃないのに、本来しなくてもいい手術」と考えるようになった。そして「ろうとしても、こう、なんやろ、誇りをもってというか、自分に自信をもって生きていってほしいな、っていうような考えがすごいあった」ため、手術を望まず、「そのことで夫婦でちょっともめた」が人工内耳をしないことを選択した。

別の母親は、「手話も大事やけど、やっぱりこの子にも危険な音とかそういう判断をさせたい」と、「(人工)内耳の手術、『この日をお願いします』」といったんは手術日の予約もした。しかしその後、人工内耳についてさらに調べるうちに「いま、元気なこの〇〇(子ども)に対して、コミュニケーションもとれてるし、要らんちゃうか、って気持ちがぼちぼちでてきて、自分の中で、で、主人は主人で、ふつふつ思ってたみたいで、でもやっぱり、なかなか夫婦でも、安易に口にださないじゃないですか、そういう重いことって」と手術の必要性に対して疑問を持つようになった。そして、子どもは「目ではしっかり判断、情報は入れてた」こともあり、「あるとき、お互いどっちからともなく『要らんか』っていうのが自然とでてきたので、じゃあ、やめます」と最終的に手術をしないことを決断した。

3.2.8 「習いたい、って気持ちはすごいある」——母親以外の家族と手話

母親以外の家族とのコミュニケーションはどうなっているのだろうか。ある家族では両親がともに手話サークルに熱心に通い、手話が堪能である。そのため、「主人と(自分が)しゃべるときもほんまは絶対、手話にずっとした方がいいいんでしょうけど、〇〇(子ども)が見てる(時は夫婦の会話も)、手話、って感じですね」と、普段から家庭内で子どもとの直接のコミュニケーションでない時も手話をしている。このように手話を夫婦の会話の際にも使用するのは、『お父さんとお母さん喧嘩してるわ、見なくていいわ』ってい

うのも必要な、って」と、聴の子どもが自分に関わらない会話も自然に耳にするのと同じように、手話でも自分に必要な情報かどうかを見て判断する経験が必要だと考えているためである。

しかし、父親は手話を習う時間をとることが難しいことも多く、上の家族のように手話に堪能な場合は少ない。もちろん家族の中でのコミュニケーション手段は、手話や音声言語によるものだけではない。ある母親は「泣いてるって分かったらティッシュをもってきてくれたり、なんかお母さんが怒ってるな、って思ったらそれも自分で読みとれるから、あ、目で動いたらいいわ、と思って」と、手話だけでなく、＜目で動く＞ことが、コミュニケーションにおいて重要な役割を果たしていることを指摘している。とはいえ、このような方法だけでは細かい事項や考えなどを伝えるには不十分なこともあるだろう。ある母親は、「(父親は) ぜんぜん手話に対して閉鎖的じゃない」とし、「(手話を) 習いたい、って気持ちはすごいあるし、いろいろ〇〇(子ども) と接するのにはいろいろ手話わからなくても指文字とかジェスチャーとかでやってますけどね」と様々な手段を交えたコミュニケーションをとっていることを述べている。「(下のきょうだいは) 手話みたいのしますね、やっぱり。一番最初に、しゃべる前に手話でしたね」と、父親よりむしろきょうだいの方が手話を自然に使っている家族が多い。

このように、母親とろうの子どもとの間で手話を主に使っている場合でも、他の家族、特に父親とのコミュニケーションになるとスムーズにいくとは限らない。このコミュニケーション上の齟齬は子どもが成長し、手話の語彙が豊富になったり、双方が伝えたいことが複雑になるにつれ、大きくなるだろうことも指摘できる。

3.2.9 「大きくなってきたら手話だけっていうのも大変」——子どもの将来

最後に、家族や学校以外との関係、また子どもの将来についての母親の考え方についてとりあげる。調査対象者のろうの子どもはいずれも小学校入学前であり、今のところ生活は家族や学校が中心である。しかし、母親たちにとって、子どもの将来や家族や学校以外との関係はこの時点から非常に気がかりなものとなりうる。

それは、「大きくなったら社会に出るじゃないですか。そしたら健聴の方が当然多いじゃないですか。で、手話が出来る人ってのは少ないですよ」という社会の現状に対する認識があるからである。そのため「口話も分かった方が本人にとっては、いい、メリットっていうかあるんじゃないかな」と、口話の必要性を感じる母親もいる。一方、ろう者と接した経験から、「ろうの、仕事されてる方もたくさんおられるんで、その辺の心配はあんまり」と、ろう者の生活を知ったことにより、子どもの将来についてもそれほど心配しなくなった、という母親もいる。「(子どもの同級生の) ろうのお父さんにしても普通に働いてるし、コミュニケーションどうしてるの、って言ったら別に紙に書いたらいい話やから問題ないよって聞いたんですごい安心して」と語る母親がいるように、実際にろう者がどのように働いているかを知ることは、子どもの将来への不安を軽減する上で大きな役割を

果たしている。

しかしそれでも、ある母親が「障害の人がいても当たり前のようにしてくれるようになったら大分、生きていくのは楽やろうなあ、とは思いますね」と述べてように、今の社会は必ずしも＜障害のある人がいるのが当たり前＞ではない、という感覚に基づく不安を多くの母親が持っている。そのため、現在子どもの主なコミュニケーションとして手話を選択している母親でも、「大きくなってきたらきっと、手話だけっていうのも大変になってくるんやろうなあ、って最近では思いますけどね」と、将来的に手話だけで生活していくことに難しさを予想している。そして、「差別じゃないけど、自分とは違うから、みたいな目でみられることも絶対あるやろうし、手話だけになったら、かわられる人とかも減ってくるからね。それももったいない話ですよ」と将来的に口話も必要になってくるのではないかと指摘している。

3.3 考察

母親が手話を積極的に使用しようとするきっかけは、コミュニケーション手段として手話を中心に使用することを、ろう学校や日常的に手話を使って生活するろう者などとの出会いによって知ることである。そして子どもとのやりとりにおいて手話を使用することで子どもにとって＜自然な＞コミュニケーション手段だと感じるようになっていく。子どもとのやりとりなどから子どもの「目で動く」力をいかしていこう、と考える母親はコミュニケーション手段として手話を積極的にとりいれるようになっていく。それまで親にとって＜当たり前＞であった音声言語を使うことを子どもに求めるよりも、ろうの子どもにとって獲得しやすいコミュニケーション方法である手話を使用する方がよい、と考えているのである。子どもとのコミュニケーションのために手話を学ぶことで、よりろう者とのコミュニケーションの機会も増えていくことになる。手話を子どものコミュニケーション手段として「自然な」ものだと考え手話を使うようになるにつれ、口話では手話とくらべ「対話が難しい」ことを感じるようになる。

このように手話に積極的に評価し、ろうの成人との交流があっても、子どもが成人した後の不安がある。それは手話を使用することで特別な目で見られたり、手話が常に通じない場面に出会ったりする可能性があると感じるからである。そのため、子どもが成長していったら手話を主なコミュニケーション手段として使い続けることについて不安がまったくないわけではない。それは、「ろう」についての知識や経験が少ない聴の母親にとって、ろうの子どもの子育てや子どもの将来への不安があるからである。この不安は、ろう学校や手話サークルなどで手話を使って生活するろうの大人と接したり、手話を使用する年長の子どもに会ったりすることで軽減されていき、手話を使用して生活していくことを肯定的に評価するようになっていく。

一方で母親が口話を必要だと考えるのは、「大きくなって社会に出た」時にやっていくために必要であると考えからである。特に、母親自身が手話をあまり使用しない場合、学

校などで顔は合わせていたとしてもろうの大人との日常的な交流や情報交換が少なくなる。また、交流が少ないため手話を使う機会も少なくなり、手話の力が伸びない、という面もある。

家庭や学校で手話を積極的に使うことでろうの子どもによってよりコミュニケーションが行いやすくなるとしても、だからといって社会全体のディスアビリティ（座主 2008）がなくなるわけではない。それは手話を積極的に評価する母親も口話を獲得する手段として評価する母親も共通して感じている課題である。

手話に通じない場面というのは、社会にでてから起こるのみ問題ではなく、家庭内でも十分起こりうることである。母親が家で手話を使うようになると、ろうの子どものきょうだいはそれを見て手話を身につけ使うようになっていっている家庭が多い。しかし、手話を積極的に評価し、子どもとの会話で使っている母親のいる家庭でも、父親は手話使用に賛成だったとしても「忙しく」、手話に堪能ではないことも多い。このような父親と母親の手話力の差は、子育ての多くを母親が担っているという家庭内の役割分業を背景としており、子どもが成長していく上での家族内のコミュニケーションにも影響を及ぼすものである。父親が手話に堪能である家族はどのような家族であるのか、どのような支援が必要なのかなどを含め、今後の課題としたい。

4 結びにかえて

本稿では、ろうの子どもがいる母親の手話への考え方を焦点とし、母親の考え方の変化を明らかにした。母親は当初、「聴覚障害」が「治る」ことに期待を抱く。だがろう者との出会いを通じて手話で生活できるという可能性を知ったり、子どもとの日常のコミュニケーションの中で手話を使うことでやりとりがスムーズに行えると感じるにつれ、手話を積極的にとりいれるようになる。そして、子どもの「聴覚障害を治す」のではなく、子どもが得意な面を生かし成長することを希望するようになる。しかし、聴者中心の社会において手話は常に通じる言語ではなく、そのことが将来にわたる手話の使用について母親が不安を感じる要素になっている。子どもたちが成長し、社会に出て行くときに手話を日常的に使用して快適に生活していくことができるかどうかは、大多数が聴者である社会全体のあり方にかかわることである。本稿で取り上げた聴の母親たちの体験は、聴者中心の社会のあり方疑問を投げかけ、変化を問うものであると言えるのではないだろうか。

謝辞

最後になりましたが、インタビューやトランスクリプトの確認など忙しい中お時間を割いて頂いた皆様、さまざまな質問に答えていただいたり幼稚部の普段の生活を観察させていただくなど多岐にわたりご協力して下さった A ろう学校幼稚部の先生方、そして一緒

にお昼を食べたり遊んだりするなかでたくさんのことを教えてくれた幼稚部の皆さん、本当にありがとうございました。記して感謝致します。

[注]

- 1) 「聴」とは「聞こえる」状態を示す。従来、「健聴」という用語が用いられることが多かったが、聞こえる状態がよい状態であるという前提に基づく「健」という言葉を避け、このように表記することがある。本稿では、トランスクリプトからの引用を除き、基本的に「健聴」「健聴者」ではなく、「聴」「聴者」という用語を用いる。
- 2) ろう学校の多くでは、補聴器などで音声を活用しながら口話を獲得する「聴覚口話法」が実施されている一方、手話を活用する学校もある(座主 2010)。2007 年度からは学校教育現場において特別支援教育体制がスタートするなど、ろうの子どもの教育は大きな変化にさらされている。ろう学校も聴覚支援学校などへの校名変更がなされた学校が多い。本稿では従来通り「ろう学校」と呼ぶ。
- 3) 新生児聴覚スクリーニング検査 (Universal neonatal hearing screening) は、新生児がおとなしくしている状態のときに音を聞かせ、この音によって誘発された聴性脳幹反応の波形を前額部に装着した電極から検出する検査である。厚生労働省が 2000 年度からモデル事業を実施した。日本産婦人科医会による 2005 年度の調査では、分娩取り扱い施設の約 60%が新生児聴覚検査を行っている。地域によって実施率に差があるものの、現在では高い地域では 9 割以上の新生児に実施されている。
- 4) 人工内耳 (Cochlear implant) は、内耳の蝸牛に電極を接触させ、音を電気信号に変換、聴神経に直接、電気刺激を伝えることによって聴覚を補助する器具である。耳の後部を広く三日月形に切開し、頭蓋骨にくぼみをあけ、人工内耳の電極によって聴神経を直接刺激するよう電極を固定する手術によって装用する。装用後は(リ)ハビリテーションが必要であり、1対1での静かな環境での会話は行えるようになっても、大人数での会話や音楽の聞き取りは難しい場合も多い。日本での第1例は1985年中途失聴の成人に行われ、1994年からは健康保険の適応が認可された。当初日本では海外に比べ成人への手術の割合が高かったが、1998年に日本耳鼻咽喉科学会が2歳以上の小児への適応を認めるガイドラインを示したことなどから、小児への手術例も増えていった。2005年までの日本での装着者は4000人弱で、うち3分の2が成人である。子どもへの人工内耳適応については、日本耳鼻咽喉科学会が家族の同意と理解や手術後の教育を受けられる施設があることなど、一定の基準を示している(日本耳鼻咽喉科学会 2006)。
- 5) 学校法人明晴学園は、1999年に設立された手話で教育を行うフリースクール龍の子学園を前身として2008年に東京で開校した。構造改革特区の制度を利用し、文部科学省の学習指導要領にある「聴覚活用」の実施を免除され、「国語」「手話」を実施する。

2008 年開校当初の構成は幼稚部・小学部だったが、2010 年に中学部も開設された。

- 6) 「ろう」という用語は先天的あるいは言語獲得前の失聴という医学的な状態を指す場合と、日本手話を日常的に話す者であるということを指す場合(木村・市田 1995)がある。後者では、日本手話を日常的に話す者を「ろう者」と呼び、言語的少数者であるとする。後者の考え方では「ろう児」とは「将来、日本手話を日常的に話そう者になる(あるいは、なるべき)子ども」である。医学的な意味で「ろう」である子どもが、必ずしも手話を日常的に使うようになるとは限らず、医学的に最重度とされても自らを「難聴」ということも、それより聴力が「軽く」ても「ろう」と名乗ることもある。本稿では以下、特に断らずに「ろう」や「ろうの子ども」という言う場合、前者の意味で用いている。
- 7) 子どもに重複障害がある事例では、子育てをする上での家族の課題は子どもとのコミュニケーション以外に重点があり、聴覚障害だけの単独の場合とは大きく状況が異なるため、今回の分析対象とはしなかった。母親がろうである場合と子どもに重複障害がある事例を除き、本稿で最終的に分析対象としたのは 11 名である。
- 8) したがって本稿の限界として、調査と分析の結果は、ろうの子どもをもつ母親全体にそのまま一般化できるものではない。A ろう学校幼稚部は、調査時点で手話を積極的に取り入れており、学校での子ども同士のやりとり、帰宅前のクラス担任から保護者への連絡などの場面等、日常的に音声言語と併用して手話が用いられていた(フィールドノートより)。このような学校の傾向から、調査対象の以外の母親も含め、調査時点で手話の使用やその役割を完全に否定する母親はいなかった。

[文献]

- Brown, P. M., Bakar, Z. A., Rickards, F. W. and P. Griffin, 2006, "Family Functioning, Early Intervention Support, and Spoken Language and Placement Outcomes for Children with Profound Hearing Loss", *Deafness and Education International*, 8(4): 207-226.
- 藤原里佐, 2002, 「障害児の母親役割に関する再考の視点」『社会福祉学』43(1): 146-154.
- Hintermair, M., 2006, "Parental Resources, Parental Stress, and Socioemotional Development of Deaf and Hard of Hearing Children", *Journal Deaf Studies and Deaf Education*, 11(4): 493-513.
- 石原邦雄, 2004, 『家族の生活とストレス』放送大学教育振興会.
- 石川准, 1995, 「障害児の親と新しい『親性』の誕生」井上眞理子・大村英昭編『ファミリーの再発見』世界思想社, 25-59.
- 石川准・倉本智明編, 2002, 『障害学の主張』明石書店.
- 春日キスヨ, 2001, 『介護問題の社会学』岩波書店.
- 金山千代子, 2002, 『母親法』ぶどう社.

- 木村晴美・市田泰弘, 1995, 「ろう文化宣言」『現代思想』23(3): 354-362.
- 小林隆児・船場久仁美・北野庸子・内藤明・小林広美・板垣里美・竹之下由香, 2001, 「人工内耳を装用した幼児にみられる母子コミュニケーション」『東海大学健康科学部紀要』7: 9-16.
- 黒田生子, 2008, 『人工内耳とコミュニケーション』ミネルヴァ書房.
- 前田信彦・大島巖・石原邦雄, 1987, 「精神障害者を抱えた家族の認知と適応——家族ストレス論からのアプローチ」『家族研究年報』13.
- 明晴学園, 2010, 「学校法人明晴学園」, 明晴学園ホームページ, (2010年10月15日取得, <http://www.meiseigakuen.ed.jp/>).
- 三科潤, 2002, 「新生児聴覚スクリーニング」『小児保健研究』61(3): 363-368.
- 中野善達・根本匡文編, 2006, 『聴覚障害教育の基本と実際』田研出版株式会社.
- 日本耳鼻咽喉科学会, 2006, 「小児人工内耳適応基準」, 日本耳鼻咽喉科学会ホームページ, (2010年10月15日取得, <http://www.jibika.or.jp/admission/kijyun.html>).
- 大久保豪, 2007, 「解説——日本における人工内耳の現状」長瀬修訳『善意の仮面——聴能主義とろう文化の闘い』現代書館, 451-454.
- 滝沢広忠, 2005, 「北海道における新生児聴覚スクリーニング検査と母親支援」『札幌学院大学人文学会紀要』77: 25-36.
- 土屋葉, 2002, 『障害者家族を生きる』勁草書房.
- , 2003, 「<障害をもつ子どもの父親>であること」桜井厚編『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房, 119-140.
- 都築繁幸, 2008, 「手話を使用する健聴の母親と聴覚障害幼児の相互作用の分析」『愛知教育大学教育実践センター紀要』11: 85-93.
- Watson, L. M., Hardie, T., Archbold, S. M. and Wheeler, A., 2008, "Parents' Views on Changing Communication After Cochlear Implantation", *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 13(1): 104-116.
- 要田洋江, 1999, 『障害者差別の社会学』岩波書店.
- 吉川昌子, 1999, 「聴覚障害児の統合保育をめぐる母親の不安について」『中村学園研究紀要』31: 111-116.
- 座主果林, 2008, 「障害の『社会モデル』——『社会モデル』の意義と障害者の経験の記述における限界」『奈良女子大学社会学論集』15: 99-112.
- , 2010, 「ろう教育における2つの教育方法——障害学の2つのモデルによる整理」『奈良女子大学社会学論集』17: 243-257.
- 全国ろう児をもつ親の会編, 2005, 『ようこそろうの赤ちゃん』三省堂.

The Attitude to the Using Sign Language : Based on the Interviews of the Mothers of Deaf Children

ZASU Karin

Abstract

The purpose of this paper is to discuss about the attitude to the using Sign Language by the mothers of deaf children. It can be said that deaf children and their families have major difficulties communicating. To solve the difficulties, there are two education methods in deaf education: the oral deaf education and the Sign Language method.

Oral deaf education has progressed over the years. This method is affected the educational administration and healthcare technologies: the hearing instruments, universal neonatal hearing screening and the cochlear implants. The Sign Language method has been influenced from the Deaf culture. Both the oral deaf educations and the Sign Language method have progressed. For deaf children and their family, to select the education is the main challenge.

I conducted interviews with the mothers of deaf children to clarify how they feel about using Sign Language.

(Keywords: mothers of deaf children, communication, the case study, Sign Language, hearing disability)